

二学期になって授業がなくなりました。近代現代哲学の歴史を教える予定でしたが、できなくなったのでその分を通信の形で伝えたいとは思っています。ただ、口で教えるのと、書いて伝えるのはかなり違います。書こうと思うと、いろいろときっちり調べないといけないので時間がかかります。

9月にした最後の授業で、少しだけ近代哲学を紹介しました。近代の哲学は、古代と中世のそれと大きく違うので、もう少し詳しく見る必要があります。西洋の歴史は大きく古代(ローマ帝国の滅亡まで)中世(1517年の宗教改革まで)近代と三つに分けられますが、この分け方は思想の歴史においても役に立ちます。西洋の思想の歴史では古代と中世は繋がりがありますが、近代には大きな方向転換が起こりました。もちろん歴史において、絶対的な断絶というものはないし、変化も長い年月を経て徐々に起こっていくものなのですが、思想の歴史では中世と近代には無視できない違いが認められます。

ところで、「なんで西洋の思想なんかを勉強する必要があるのか。我々は日本人なんやから日本の思想の歴史を勉強すべきとちがうか」と疑問に思う人があるかもしれません。それは、残念ながら現代の世界を支配している思想はほとんど西洋原産だからです。例えば、政治思想(民主主義、社会主義)にしても、あるいは心理学にしても、倫理学にしても、自然科学にしても、西洋で生まれ発展したもので、それが東洋にもアフリカにも伝えられた。中国も北朝鮮もベトナムも、その支配を正当化している思想は19世紀ヨーロッパで生まれたマルクス主義です。もちろん、毛沢東や金日成が適当に修正していますが、根本はマルクスとレーニンの思想です。これに対して、中国で生まれた思想である朱子学や老荘思想は、東洋では影響を持ちましたが、現在はほとんど影響力を持っていません。

ここでもう一つ注意すべき事は、日本を始め他のアジアやアフリカの世界が影響を受けた西洋思想というものは、西洋の近代以降の思想であるという点です。日本には16世紀にポルトガルやオランダ人によって西欧文化が伝えられましたが、それも鎖国によってほとんど消えてしまいました。その後、ペリー提督がやって来て開国し、その後日本は必死に西欧文化を吸収しようとします。その文化は、西洋の近代に発達した文化でした。すなわち、市民革命を終えて立憲政治の体制が確立している国々、産業革命を終えて日本とは比較にならない生産力を持っている国々の文化でした。日本は、ぼやっとしていてこれらの列強の植民地になる危険があるので、死にものぐるいでそれらの国々をまねて自らも近代国家としてやっていこうと努力したのですが、それが明治以降の日本の歴史です。

日本が欲しかったのは何よりも富国強兵に役に立つ西洋の科学技術でしたが、その科学技術の裏にある思想にも興味を示しました(ここが中国と異なるところだそうです。中国は科学技術だけを輸入しようとしたらしい)。しかし、近代の科学技術の発展を支えた思想は、古代ギリシアや中世ヨーロッパで花開いた哲学ではなく、近代哲学でした。20世紀の中頃まで日本だけでなく欧米でも、哲学というとギリシア哲学と近代哲学のことで、中世の哲学はほとんど無視されていました。「デカンショ節」という明治時代から学生によく歌われた歌の「デカンショ」とは「デカルト、カント、ショーペンハウワー」という近代の哲学者の名前だそうです。これも日本で哲学というと近代哲学を指すということを示していると言えるでしょう。

西欧の近代には、「進歩史観」という思想が支配していました。つまり、人間の歴史はつねに進歩していて、際限なく進歩するという考えです。その進歩を支えているのが、科学技術の発展でした。しかし、この科学技術の発展は、必ずしも人類の発展にはつながらないのでは、という疑問が19世紀の末頃に起こってきます。人類は本当に進歩しているのか、という疑問です。この疑問が現実になったのが第一次世界大戦というヨーロッパが初めて経験した悲惨な体験でした。その大戦では、科学技術の発展

の結果である、優れた大量破壊兵器や毒ガスのような化学兵器が容赦なく使用され、それまでに見たことのなかったような大勢の人々が命を失ったのです。こんな悲惨なことは二度とご免だ、と世界は国際連盟を作り、またもう二度と戦争はしませんという約束までしたのです（1928年、不戦条約）。しかし、前よりもっとひどい第二次世界大戦が起こり、その結末は原子爆弾の使用、多くの独裁国家〔共産主義の〕の出現と冷戦という状況になってしまったのです。また、戦後の平和な時期でも、公害に始まる地球環境問題や生命倫理など、科学技術の力は無条件によいものではないことが痛感されたのです。

こういった悲惨な状況を目の当たりにして、それまで信じてきた進歩の思想が信用を失い、「近代というものはそんなにええもんちゃうぞ」という考えが起こってきました。あるいはさらに進んでも近代は終わった（ポストモダン）と言う人もいます。こういった人たちの中に、古代と中世の哲学を見直そうとする動きもあります。私はこれに賛成です。近代が否定しようとして古代と中世に、実は優れた遺産があることを見せることができたらと思っています。

以前近代の哲学を始めたのはデカルトだと言いました。しかし、もう一人、重要な人物がいます。それがイギリス人のフランシスコ・ベーコン（1561~1626）という人です。この人もデカルトと同じく、それまでの哲学に反対します。一つの対立点は、学問をする人の心の持ち方についてです。それまではギリシアの伝統に従って、学問は「真理を探究し、真理を発見し、それを見つめて楽しむ（これを観照と言う）」という観照的な態度を一番としていました。ベーコンはこれに対し、「真理はただそれを見て、『ええな、綺麗やな』と見て楽しむだけなら何の



役にも立たん。真理は知るためだけではなく人間のために利用できるようにするためにするもんじゃ。（知は力なり）」と主張したのです。言い換えると、「人間は学問、とくに科学の知識によって自然を支配すべきだ」となります。これが近代の特徴です。この信念に従って、産業革命を終えた国々は、地球上のあらゆるところを開発して、そこから富を引きだそうとしたわけで、これは今も続いています。その結果、人類は今までに見たことのない繁栄を得ましたが、同時に地球環境の破壊も進んだのです。

ベーコンとデカルトに共通する点は、それまで誰も疑わなかったことを疑うということです。しかし、疑ってだけいるわけではありません。疑った末に残るはずの誰もが認める真理を探そうとします。この第二段階で、デカルトとベーコンは大きく意見を異にします。デカルトは、その疑いをすべてのことに広め、結局それでも疑えない、誰もが認めねばならない真理として「我思う、故に我有り」という原理を見つけた、と主張する。それに対して、ベーコンは、「自然をありのままに観察し、そこから得られたデータを集めて法則を作る」としました。これを帰納法(induction)と言います。観察ということは、人間の感覚を使ってするわけですから、感覚も疑えと言ったデカルトには認めがたい方法ですね。ベーコンの手法は、イギリス人の好みを表しているようで、感覚が捉えるデータを基本とするやり方で経験論と呼ばれ、ロック（1632~1704）、パークレイ（1685~1753）、ヒューム（1711~76）と言った後継者を生み出します。

デカルトは、その第一の原理（考える自分がいる）ということから出発して、理論的に正しいと思える結論を次々と導こうとするわけです。これを演繹(deduction)と言います。このやり方は、ヨーロッパ大陸では大いに受け入れられ、彼の後スピノザ（1632~77）やライプニッツ（1646~1716）という哲学者たちが、同じ出発点から始め、大きく異なる結論の哲学を打ち立てました。この流れを大陸の合理論と言い、イギリスの経験論とともに西洋の思想の主流となるのですが、ともに致命的な欠点を持っていることが18世紀の末の哲学者の頭を悩ますこととなります。